

Institute for Language Education  
Aichi University, Nagoya  
**Goken News**  
No. 22 December 2009



ハンガリー・ブダペストのくさり橋：  
1849年に完成。それまで船でしか行き来できなかったブダとペストの間を  
初めて結んだ橋。ドナウ川に架かるくさり橋はブダペストのシンボルである。

CONTENTS

- |  |    |                                      |    |
|--|----|--------------------------------------|----|
| ・ 英文を正しく読む 実践編<br>(服部 茂) .....                 | 2  | ・ ロンドンの第一印象<br>(安藤 聡) .....          | 12 |
| ・ 英語の辞書について (2)<br>英英辞典<br>(北尾 泰幸) .....       | 4  | ・ 木にかかる「青虫」<br>(矢田 博士) .....         | 15 |
| ・ 独学で語彙力をつける方法とは<br>(林 姿穂) .....               | 9  | ・ 色彩の不思議、伊藤若沖の『動植綵絵』<br>(島田 了) ..... | 18 |
| ・ D.H.ロレンスの動物の描写について<br>(その3)<br>(山田 晶子) ..... | 11 |                                      |    |

## 英文を正しく読む 実践編

名古屋語学教育研究室  
服部 茂

< 英文 1 > は下線部を、< 英文 2 > はすべてを、  
語彙、文法、構文、英文構造に立脚して和訳せよ。  
< 英文 1 >

Our conduct towards our fellow-men is determined by the principle of self-preservation. The individual acts towards his fellows in such and such a manner so as to obtain advantages which otherwise he could not get or to avoid evils which they might inflict upon him. He has no debt towards society; he acts in a certain way to receive benefits, society accepts his useful action and pays for it. Society rewards him for the good he does it and punishes him for the harm.

< 英文 2 >

It is easy to say that the writer should have an occupation that provides him with his bread and butter and write in such leisure as this occupation affords him. This course, indeed, was forced upon him very generally in the past, when the author, however distinguished and popular, could not earn enough money by writing to keep body and soul together.

英文を正確に読む力をつけるためには、英文構造を見抜く力を養成しなければならない。英文読解は、ある意味、知的な作業となるので、読む訓練は、不可欠である。ある一定の期間、精読をするのは、有効な練習になる。どんな英文もごまかさずに読む。こうして、いろいろな形態の英文と向き合うにつれて読む力が備わってくる。もちろ

ん、その英文の知識背景も伴わなければならない。これは、英語とは別に日ごろから新聞、ニュースなど興味、関心を深くしておくことである。

英文構造の練習の内訳は、語彙、文法、構文を確認しながら学習し、個々の単語のはたらきなどを確実にインプットして、ある一定の英文の配置を理解することである。文は読まれるために書かれるので、誰もがわかる決まった規則で書かれていなければならない。精読は、英文の配置の規則を習熟することがその目的である。英文は、一つのセンテンスに一つの主語、述語動詞を含み文が形成されている。さらに、最小単位で意味をなす文のかたまりがくる。そのかたまりが、その文中においてどんな役割をしているか、つまり独立しているか(文の要素)、または、ある語句にかかっているか(形容詞節・句、副詞節・句)を区別する。その際、大切な文法は関係詞である。関係詞は、代名詞、副詞、コンマあり、なしのそれぞれの用法は完全に理解しておきたい。そして、指示・人称代名詞にも注意したい。その代名詞が何を指すかは、随時確認して、英文の内容についていく。代名詞は、英語の特徴でもある。その用法は、英作文にでも応用したい。

このエッセイで、今回取り上げたいのは、共通関係である。読者の中には、英文を訳そうとして日本語がつかないという経験をした人もいることと思う。それは、英文構造が見抜けていないことに起因すると思われる。つまり、どの語句と語句が関係しているかがつかめていない場合がある。以下に、共通関係の用法をみってみる。

< 例文 1 >

Everyone must not and cannot ignore the rule.  
(誰もが、その規則を無視をしてはいけないうし無視することもできない)

この場合は、must not と cannot が and で結び付けられており、共通要素は、the rule である。

< 例文 2 >

No man can live by and for himself.  
(一人でもたまた独力で生きられる人はいない)

これは、by himself と for himself が and で結びつけられている。つまり、共通要素は、himself である。

### <例文 3 >

She has had a varied, and sometimes interesting, life.

(彼女は、さまざまな、ときにはおもしろい生活を送ってきた)

このパターンは、下線部の形容詞がいずれも and で結ばれ life を修飾している。その他には、S+V+that S +V・・・ and that S+V・・・では、最初の that 節と二番の that 節が and で結ばれ S+V が共通要素になっているパターンもある。最初の that は、省略できるが原則二番目の that は、意味が曖昧になるので省略しないほうが無難である。英文を読んでいて等位接続語、つまり、and、or、but がでてきたら、前文とどうつながっているかを確認することが大切である。

今回、冒頭に挙げた英文は、サマーセットモーム (William Somerset Maugham; 1875~1965) のエッセイである。モームは、英国の小説家で劇作家である。英国ではその評価は分かれるとのことらしいが、日本においては、親しまれている作家である。以前には、大学入試の英文読解では常連だった。筆者も高校生のとき教科書で読んだ覚えがある。彼は、10歳のときに孤児となりその後、叔父に引き取られ、つらい少年時代を送る。青年になり医学を修めたが、作家の道へと進む。彼の人生経験からくるその独特の人生観、思想は深く人間を考えさせる。<英文 1 > は、*A Writer's Notebook* (1949)、<英文 2 > は、*Summing Up* (1938) からのエッセイである。小説としての代表作は、『人間の絆』(*Of human Bondage*: 1915)、『月と六ペンス』(*The Moon and Sixpence*: 1919) がある。

では、<英文 1 > と <英文 2 > の英文構造を明らかにしてみる。

### <英文 1 >

まずは、S+V をさがす。そうすると、The individual acts が S+V の関係になっている (acts

の s に注目)。次に towards his fellows (前置詞+名詞) でひとかたまり。ついで、in such and such a manner (前置詞+名詞) でひとかたまり。so as to obtain advantages which otherwise he could not get のかたまりで意味を取る。which 節は関係代名詞で advantages を修飾している。次の or to に注目する。これは、先ほどふれた共通関係で、so as to の to である。その to が、to avoid evils which they might inflict upon him とつながっているのである。この which 節も直前の evils を修飾する関係代名詞である。二つめの下線部のポイントは、the good he does it である。it は、society を指し、does は、do+O+O の 4 文型で、この場合は、「~に・・・(利益・損害)を与える」の意。he does it が the good を修飾している (関係代名詞 that の省略)。

<英文 2 > を見てみよう。まず押さえるポイントは、it is ~ to do・・・の構文である。an occupation that provides him with his bread and butter の that は、occupation を修飾する関係代名詞。bread and butter は、「生計の手段」の意。そして、今度も and に注目。この and write は、the writer should とつながる。続く英文は、however distinguished and popular でひとかたまり (however+形容詞+S+V) で、「たとえ (今は) 有名で人気があったとしても」の意。したがって when the author は、when the author could not earn enough money by writing to keep body and soul together と続く。when は、in the past を具体的に説明する関係副詞のコンマありの用法 (継続用法)。keep body and soul together は、「なんとか生活していく」の意。by writing はひとかたまりでとらえて「書くことによって」の意。

以上、英文構造に注目して英文をみえてきた。もちろんこうした分析的な読み方は、あくまでも、訓練の過程のことである。いずれ、どんな英文にも自信をもって、前から読めるようになれば卒業である。もうそのときは、主語がどうの動詞がどうのということは必要がない。こんどは、英文そのものの中身を鑑賞したり、情報を得たりすることに専念できる。本来の、英文読解ができる。英文を、自分のことばで要約できるようになればさらに良い。文脈を追いながら、辞書でその文脈に

0.合う英訳を見つけて辞書を使えば、辞書を使うコツがつかめるであろう。読者の皆さんも、至極の名作を一日数行でも辞書を引ながら読んでみるのはどうですか。また機会があれば、英語と日本語の違ったニュアンスが楽しめる文学作品も解説したいと思う。

<英文1>と<英文2>を設問に応じてこなれた訳ではなく、あえて訳の過程が分かるよう試訳する。( <英文1> は、下線部のみ)

<英文1>

個人は、別の方法では得ることができない利益を手に入れ、また加えられかもしれない悪を避けるためにあれこれの方法で自分の仲間に対して振舞う。(中略)

社会は、社会に与えた利益に対して人に報酬をあたえ、害に対して人を罰する。

<英文2>

作家は、生計の手段を与える職業をもちこの職業が与える自由時間に書くべきだと言うことは簡単だ。実際、この過程は、作家は、たとえ(今は)有名で人気があったとしても、書くことによってなんとか生活していくほどの十分なお金を稼ぐことができなかつた過去において至極一般的に強いられていたのだ。

## 英語の辞書について (2) 英英辞典

法学部  
北尾 泰幸

### 1. はじめに

前号の語研ニュース (No. 21) で英和辞典について取り上げたが、今回は英英辞典 (English-English Dictionary) について取り上げたいと思う。学生諸君は英英辞典を使ったことがあるだろうか。

名古屋校舎の法学部・経営学部・現代中国学部の学生諸君は、「英語が専門ではないので、英英辞典を使うことなど思いもよらなかった。」とか「英英辞典なんてまだまだ難しすぎますよ。」という意見を述べるかもしれないが、愛知大学の学生諸君は十分に英英辞典を使いこなせるだけの英語力があると思う。使い方によっては英英辞典は非常に役に立ち、英和辞典だけでは得ることができない知見を得ることができるので、ぜひ英和辞典とともに使っていただきたい。しかしながら、英英辞典では英語の単語・熟語の意味が英語で説明されているため、英語母語話者が使うような難しい英英辞典を使ってしまうと、まるで蟻地獄に入って抜け出ることができないような感覚、あるいは富士の樹海で迷ってしまったような感覚に陥ってしまう。つまり、ある単語の意味を調べたところ、その説明文の中に出てきた英単語に意味が分からないものがあるため、調べている単語の意味をきちんと把握することができず、そのページに付箋(ポストイット)でも貼って印を付けておいて、その分からなかった説明の中の英単語の意味を引いてみる。すると、その新たに引いた単語の説明の中にまた分からない単語が出てきたので、さらに付箋を貼って印を付けておき、その単語を引く…。こうやって単語を引く作業を繰り返していると、知らないうちに数時間経っていて、辞書は付箋で膨らみ、まるでカリフラワーのようになっているとともに、いったい元々何の単語を引いたのか分からなくなってしまっているだろう(これはこれで「ことばの海」に溺れた感覚を味わうことができ、幸せといえれば幸せかもしれないが)。

したがって、学生諸君は、英語母語話者が使うような英英辞典ではなく、英語を外国語として学ぶ人向けの英英辞典を使う必要がある。本稿ではこのような英英辞典を紹介しながら、英英辞典を使うことの利点を探っていききたいと思う。

### 2. 英英辞典の特色

英語を外国語として学ぶ学生諸君にお勧めしたい英英辞典は次の5冊である。

(1) a. Sinclair, J. et al. (2006) *Collins COBUILD*

*Advanced Learner's English Dictionary (Fifth Edition)*, HarperCollins Publishers. [COBUILD<sup>5</sup>]

邦題：『コウビルド英英辞典 改訂第5版』  
HarperCollins Publishers (発行)、日本出版貿易 (発売)

b. Mayor, M. et al. (2009) *LONGMAN Dictionary of Contemporary English (Fifth Edition)*, Pearson Longman. [LDOCE<sup>5</sup>]

邦題：『ロングマン現代英英辞典 5訂版』  
Pearson Longman (発行)、桐原書店 (発売)

c. Walter, E. et al. (2008) *Cambridge Advanced Learner's Dictionary (Third Edition)*, Cambridge University Press. [CALD<sup>3</sup>]

d. Rundell, M. et al. (2007) *Macmillan English Dictionary for Advanced Learners (Seventh Edition)*, Macmillan Education. [MED<sup>7</sup>]

e. Wehmeier, S. et al. (2005) *Oxford Advanced Learner's Dictionary (Seventh Edition)*, Oxford University Press. [OALD<sup>7</sup>]

この5つの英英辞典の中でいちばん特徴的なのは、(1a) の『コウビルド英英辞典 改訂第5版』(以下、[COBUILD<sup>5</sup>]) である。『コウビルド英英辞典』は初版が1987年に発行されており、初版発行から約20年間改訂を重ね、現在は改訂第5版が販売されている。説明の仕方に癖があり、それまでの英英辞典が取ってきた説明の手法とは大いに異なっていたため、昔はコウビルドの説明方法を嫌う人も少なからずいた。[COBUILD<sup>5</sup>] の説明の独自性を探るために、動詞 discuss を例に、(1a) の [COBUILD<sup>5</sup>] と (1b) の『ロングマン現代英英辞典 改訂第5版』(以下、[LDOCE<sup>5</sup>]) の説明法を比べてみよう。

(2) a. [COBUILD<sup>5</sup>]

**discuss:**

1. If people **discuss** something, they talk about it, often in order to reach a decision.
2. If you **discuss** something, you write or talk about it in detail.

b. [LDOCE<sup>5</sup>]

**discuss:**

1. to talk about something with another person or a group in order to exchange ideas or decide something
2. to talk or write about something in detail and consider different ideas or opinions about it

現在、調べている単語は discuss である。しかし [COBUILD<sup>5</sup>] では第一義の説明でまず、If people discuss something, ... と始まっており、調べているはずの discuss が語義の中に現れているのである。例えば国語辞典で同じような説明がなされている場合を考えてもらいたい。「話し合う」の意味を引いたとき、「もし人々が何かを話し合うのなら…」という記述から説明が始まっていたら、一瞬面食らってしまうだろう。従来の英英辞典では動詞の意味を説明するときには、[LDOCE<sup>5</sup>] のように to 不定詞を用いて説明するのが主流であり、現在もこのように to 不定詞で動詞の意味を説明している辞書が多い。

では、[COBUILD<sup>5</sup>] はこのように if 節の中に調べている語句を書き記すことで、何を表そうとしているのだろうか。実は [COBUILD<sup>5</sup>] ではこの if 節の記述を設けることにより、discuss の語法を説明しているのである。If people discuss something, の部分で、discuss は他動詞であり、後に直接、名詞句を取ることを明示しているのである。実際は to 不定詞表記をしている [LDOCE<sup>5</sup>] でも、例えば次の例文から、discuss が名詞句を従える他動詞であることが分かる。

(3) [LDOCE<sup>5</sup>] **discuss**

- a. Littman refused to discuss the case publicly.
- b. If you would like to discuss the matter further, please call me.

しかしながら、[COBUILD<sup>5</sup>] では、例文だけではなく語義に語法を書き記すことによって、語法により目を向ける工夫がなされているのである。

この [COBUILD<sup>5</sup>] の特徴である、語法に焦点を当てた表記を、他の見出し語で見てみよう。

- (4) a. **homework** /həʊmwɜ:k/ [1] **Homework** N-UNCOUNT  
is school work that teachers give to pupils to do at home in the evening or at the weekend. □ *Have you done your homework, Gemma?* [2] If you **do** your **homework**, you find out what you need to know in preparation for something. □ *Before you go near a stockbroker, do your homework.*
- b. **interested** /ɪntrestɪd/ [1] If you are **interested** in something, you think it is important and want to learn more about it or spend time doing it. □ *I thought she might be interested in Paula's proposal... I'd be interested to meet her.* [2] An **interested** party or group of people is affected by or involved in a particular event or situation. □ *All the interested parties eventually agreed to the idea.* [3] → See also **self-interested**.
- c. **handsome** /hænsəm/ [1] A **handsome** man has an attractive face with regular features. □ *...a tall, dark, handsome sheep farmer.* [2] A **handsome** woman has an attractive appearance with features that are large and regular rather than small and delicate. □ *...an extremely handsome woman with a beautiful voice.* [3] A **handsome** sum of money is a large or generous amount. [FORMAL] □ *They will make a handsome profit on the property.* † **handsomely** He was rewarded **handsomely** for his efforts. [4] If someone has a **handsome** win or a **handsome** victory, they get many more points or votes than their opponent. □ *The opposition won a handsome victory in the election.* † **handsomely** The car ran perfectly to the finish, and we won **handsomely**.
- d. † **drop in** If you **drop in** on someone, you visit them informally, usually without having arranged it. □ *Why not drop in for a chat?... She spent most of the day dropping in on friends in Edinburgh.*

(4a) の homework では、第二義で “If you do your homework,” という表記がなされており、「宿題をする」は “do one’s homework” であるという連語 (コロケーション) 情報を載せている。(4b) の interested では、例えば第一義の定義の中の “If you are interested in something,” の部分で、「～に興味を持つ」という場合は “be interested in” の形を取ることを明示している。(4c) の handsome では第一義の “A handsome man has an attractive face with regular features.” の定義でいわゆる「ハンサムな男」の意味を載せているが、第二義の “A handsome woman has an attractive appearance with features that are large and regular rather than small and delicate.” の定義にあるように、A handsome woman... と書き始めることによって、英語では handsome は男性だけでなく女性にも使われる形容詞であることを示している。(4d) の drop in では、“If you drop in on someone...” の部分で、drop in は誰か「人

を訪ねることを述べるときには前置詞 on を従えることを示しているとともに、どこか「場所」にちょっと立ち寄りよりも、誰かのもとに立ち寄るときに使う、つまり目的語に「人」を従えることが多いことを示しているのである。

このように、[COBUILD<sup>5</sup>] は独自性あふれる定義を用いることにより、語の使い方、つまり語法を詳細に説明しているのである。

(1b) の『ロングマン現代英英辞典 5訂版』([LDOCE<sup>5</sup>]) も大学生には使い勝手がいい辞書である。定義をできる限り基本的な語で記す配慮がなされているとともに、5訂版ではコーパス (corpus) を駆使してコロケーション (collocation: 語と語のつながり) や類義語 (synonym) に関するコラムを設け、ある語を引くとその語の使い方や他の類義語とのニュアンスの差を探ることができる配慮がなされている。また、例えば discuss の項では、日常の英語 (everyday English) では、discuss よりも talk about のほうが頻繁に用いられるといった、言語の使用域 (register) に関する情報も載っている。英語を読むときにももちろん役立つ辞書であるが、[COBUILD<sup>5</sup>] 同様、英語を書くときにも重宝する辞書だと言えるだろう。

(1c) の Cambridge Advanced Learner’s Dictionary (Third Edition) (以下、[CALD<sup>3</sup>]) は、1995年に発行されその後好評を得ていた Cambridge International Dictionary of English ([CIDE]) の流れを汲んでいる辞書である。語の使い方 (語法) を詳しく載せているのが非常に特徴的である。例えば、[CALD<sup>3</sup>] の ask は次のように書かれている。

- (5) **ask** /ɑ:sk/ ⑤ /æsk/  
▶ verb QUESTION 1 ⑤ [I OR T] to put a question to someone, or to request an answer from someone: [+ TWO OBJECTS] *She asked me a question.* ○ *Can I ask you a favour?/FORMAL Can I ask a favour of you?* ○ *She asked a question about Welsh history.* ○ *She asked me about Welsh history.* ○ *She asked about Welsh history.* ○ [+ QUESTION WORD] *I've no idea what time the train leaves. Ask the guard whether he knows.* ○ *I asked the guard the time of the train's departure.* ○ *I asked when the train would leave.* ○ [+ SPEECH] *"What time does the train leave?" I asked.* ○ *If you need any help, please don't hesitate to ask.* ○ *You should ask (your accountant) for some financial advice.* ○ [+ to INFINITIVE] *You should ask your accountant to give you some financial advice.* ○ *I asked to see my accountant.* ○ *I'd like to ask your advice/opinion on a financial matter.* ○ *You have to ask permission to leave.* ○ [+ that] FORMAL *The solicitor asked that her client (should) be allowed to make a telephone call.* ○ FORMAL *We ask that any faulty goods (should) be returned in their original packaging.* INVITE ⑤

(5)で分かるように、[+ TWO OBJECTS], [+ QUESTION WORD], [+ to INFINITIVE], [+ that] のような情報とともに、それに対応する例文が載っている。これにより、ask がどのような形で用いられるのかがよく分かり、英語を書く上で非常に役に立つ。

また、[CALD<sup>3</sup>] は例文の質がよいことでもよく知られている。辞書を「引く」だけでなく、「読む」ことを味わえる辞書でもある。

(1d)の *Macmillan English Dictionary for Advanced Learners (Seventh Edition)* (以下、[MED<sup>7</sup>]) もコーパスを駆使した辞書である。語の頻度を星印で表しているが、頻度の高い語については、語の詳しい説明の前に、各定義の核となる情報を載せているので、学習者にとっては語の定義を見つけやすいだろう。また文法や語法の説明が詳しい。外国語として英語を学ぶ人を対象としていることが窺える。例えば、discuss の項では、discuss が前置詞 about を伴わないことを別のコラムを設けて書いている。また do の項では、do の助動詞としての使い方、自動詞としての使い方、他動詞としての使い方が詳しく説明されている。また、a lot と lots の違い、economic と economical の違いなど語のニュアンスの差もコラムを設けて説明されている上、ちょうど辞書の真ん中あたりに、英語のライティングのコツや語彙の増やし方等の説明が97ページに渡って載っている。英語の百科事典のような感じがする辞書である。

(1e) の *Oxford Advanced Learner's Dictionary (Seventh Edition)* (以下、[OALD<sup>7</sup>]) は1948年に初版が発行された伝統的な良い辞書である。第7版では、例えば money と cash の違いなどの同義語に関する情報や、informal English では wh 語 (what, how, whether 等) の前では depend on より前置詞 on を伴わない depend のほうがよく用いられるなどの文法情報も詳しく載るようになった。

### 3. 語の微妙なニュアンスを探る

前章で各英英辞典を紹介し、特に [COBUILD<sup>5</sup>] を例に、英英辞典から語法 (phraseology) を探ることができることを述べたが、ここでは英英辞典を使うことによって、語の微妙なニュアンスを探ることができるという利点があることを、いくつ

かの例を出して示したいと思う。

#### 3.1 offer, supply, provide, give

例えば和英辞典で「提供する」を調べると、次のような語が載っている。

(6) offer, supply, provide, give

(6) に挙げた語はどのようなニュアンスの差があるのだろうか。各語を英和辞典で引き、例文をしつかり吟味すればなんとなくニュアンスが分かってくるが、英英辞典を引くと、英和辞典だけでは十分には分からない、さらに深い語のニュアンスが分かる。例えば、[LDOCE<sup>5</sup>] では次のような定義が挙げられている。

- (7) a. **offer:** to ask someone if they would like to have something, or to hold something out to them so that they can take it
- b. **supply:** to provide people with something that they need or want, especially regularly over a long period of time
- c. **provide:** to give something to someone or make it available to them, because they need it or want it
- d. **give:** to let someone have something as a present, or to provide something for someone

(7a) の offer の定義から、offer は相手が欲しがっているものを尋ねたり、相手に物を与えるという意味であることが分かる。(7b) の supply の定義からは、supply は offer よりも、もう少し限定された意味合いを持つことが分かる。supply も offer 同様に相手に物を与えるが、supply の場合は相手が (とりわけ長年) 必要としている、あるいは欲しがっているものを与えるという意味合いが含まれていることが分かる。(7c) の provide も、“because they need it or want it” の記述から、相手が必要としているもの、あるいは相手が欲しがっているものを渡すということが分かる。(7d) の give の定義からは、同じ提供する場合でもブ

プレゼントとして渡す場合には give を用いるのがよいことが分かる。このように、英和辞典の日本語の定義だけでは分からないような語の細かいニュアンスを探ることができるのが英英辞典の利点の一つである。

### 3.2 with flying colors

“with flying colors” という熟語があるが (イギリス英語表記: with flying colours)、どのような意味をご存知だろうか。飛んでいる色とともに... という英語だが、意味は「大成功を収めて、見事に」という意味である。前号の語研ニュース (No. 21) で『ウィズダム英和辞典 第2版』が語法を詳しく記述しているいい英和辞典であることを述べたが、その『ウィズダム』ですら、「大成功を収めて、見事に」の記述しかなく、また例文が載っていない。

そこで、英和辞典の「大成功を収めて、見事に」という意味を頼りに、次のような文を作成したとする。

(8) # The Hanshin Tigers won the pennant with flying colors. (阪神タイガースは見事にペナントレースで優勝した。)

(8) の話者は、阪神タイガースの優勝に至る様子が素晴らしく、その様子を強調したくてこの文を使っているが、(8) の文を聞いた英語母語話者は思わず吹き出してしまっただろう (主語が阪神タイガースなので吹き出すのではない: 笑)。次の英英辞典の定義を見ると、なぜ英語母語話者が笑ってしまうかがよく分かる。

(9) a. [LDOCE<sup>5</sup>]

**with flying colours:** If you pass a test with flying colours, you are very successful in it.

b. [COBUILD<sup>5</sup>]

**with flying colours:** If you pass a test with flying colours, you have done very well in the test.

[LDOCE<sup>5</sup>], [COBUILD<sup>5</sup>] とともに “If you pass a test with flying colours,” の部分から、この “with

flying colors” という語は試験に関して使われる語であることが分かる。従って、(8) のような試験に全く関係のない状況では使うことができないということになる。このように、英英辞典を用いると、その語義から、英和辞典に載っている日本語の意味だけでは理解できない語の使い方を推し量ることができるのである。

### 3.3 organized

日本語に訳しにくい英語というものがいくつかある。例えば (10) のような文で出てくる “organized” がそうである。

(10) She's not a very organized person and she always arrives late at meetings. [CALD<sup>3</sup>]

『ウィズダム英和辞典 第2版』を引くと、“organized” には例文とともに次のような語義が与えられている。

(11) **organized:**

1. 《**名**の前で》組織的な、団体の 活動など
2. 考えが 整理された、行事・会議などが 首尾よく行われて、準備周到な
3. 人が てきぱきした、有能な; 事が 能率 [効率] のよい

『ウィズダム』の第三義に 人が とあるので、人である She が主語である (10) にはこの第三義が当てはまると考えられるが、どれもしっくりいかない。このようなとき、英英辞典を引くと、この “organized” という語の「感覚」がよく分かり、ぴったりとした日本語訳がうまく浮かばなかったとしても、言わんとしている英語の文の内容がなんとなく掴めるのである。英英辞典では次のような語義が与えられている。

(12) a. [COBUILD<sup>5</sup>]

**organized:**

1. An **organized** activity or a group involves a number of people doing something together in a structured way,



rather than doing it by themselves.

2. Someone who is **organized** plans their work and activities efficiently.

b. [CALD<sup>3</sup>]

**organized:**

1. arranged according to a particular system
2. describes someone who is able to plan things carefully and keep things tidy
3. (of travel, visits, activities, etc.) planned and arranged for you to do, especially as part of a group

c. [OALD<sup>7</sup>]

**organized:**

1. [only before noun] involving large numbers of people who work together to do sth in a way that has been carefully planned
2. arranged or planned in the way mentioned
3. (of a person) able to plan your work, life, etc. well and in an efficient way

[COBUILD<sup>5</sup>] の第二義、[CALD<sup>3</sup>] の第二義、[OALD<sup>7</sup>] の第三義が (10) の organized の意味に当たるが、日本語の訳には十分には表れない、「何事においても、きちんと考え、用意周到にきっちりと行う」といったような organized の語の雰囲気十分伝わってくるだろう。

このように、英英辞典の語義を読むだけで、英和辞典の日本語による語の意味の説明だけでは分からない、語の微妙なニュアンスを知ることができるのである。(注：紙幅の都合で書くことができないが、前号の語研ニュース (No. 21) で取り上げた "apparently" など、英英辞典を引くと、英和辞典では十分には分からない語感がよく伝わってくる。ぜひ英英辞典を引いて確かめていただきたい)。

#### 4. まとめ

以上見てきたように、英英辞典は英和辞典では十分に探ることができない語のニュアンスを探ることができるがよく分かっていただけだと思う。また中でも [COBUILD<sup>5</sup>] (『コウビルド英英辞典 改訂第5版』) は、語義の部分から語の使い方を探ることができるがよく分かっていただ

けたと思う。本稿で示したように、英英辞典も辞典ごとに特色があるので、できれば複数の英英辞典を手許に置いていただきたいが、学生諸君は1冊でもいいので、ぜひ手許に置いて英語学習に大いに活用していただき、英語の奥深さ・英語の楽しさを体感していただきたいと思う。

## 独学で語彙力をつける方法 とは

名古屋語学教育研究室  
林 姿穂

### 1. 語彙習得における問題点と背景

第二言語 (L2) の語彙を如何に覚えて語彙力を伸ばすか、その方法については自分自身で試行錯誤して見つけ出そうとしてきたのではないだろうか。家庭学習で単語の暗記がどのような方法でされているかは学習者まかせになっていることが多く、外国語講師があまり介入していないように思われる。私自身が学生時代に受けた英語の授業を振り返ってみても、学習のペース作りとして単語テストを受けるといった形が多かった。授業では語彙力強化のみに焦点を当てるといったよりは英語の技能を全体的にアップさせることを目的としている事が多い。知っている単語「数」が重要であると考えて学ぼうとする多くの第二言語学習者に対し、教育現場では文法や読解といったその他の知識を重視するので、両者間でずれがあると指摘する研究者や専門家もいる。ほぼ独学で、多くの単語を覚えようと試みる学習者は大学生だけでなく、中学高校で単語テスト準備をする生徒にも当てはまる。ここではL2の語彙を習得するとはどういった状態を指すのか明確にしたい。また、独学で語彙力強化に努める学習者に効果的な学習法をいくつか提案したい。

## 2. 語彙力の捉え方

語彙力があるとはどのような状態を指すのだろうか。例えば学習者が、L2の単語を聞いて第一言語(L1)の訳語が分かる事だと考える学習者もいるだろう。また、単語の綴り(spelling)を見て訳語が分かるということが語彙を獲得したことになると思う者もいるかもしれない。しかしそのような知識だけでは一部分の知識であるとしが言わざるを得ず、それらの単語がどのように使われるかまでは理解できたとはいえない。語彙が習得される最良の条件は実際にはどう使われるか(real contexts)を学ぶことであるという多くの指摘がある。英語学習者における語彙習得に置き換えるならば、まずは英語で書かれた新聞記事や文学作品、実際の会話での語彙の使われ方に注目する事である。そしてreal contextsでの単語の働きと意味を覚えるよう心がけることである。語彙力がつくということは、使い方が分かる段階でもあり、更にはその単語を自由にアウトプットできるレベルに到達することでもある。

## 3. 日本人学習者に見られる典型的な学習法

L1である漢字や平仮名を覚えるときに日本人学習者は何度も文字を書いて学習してきたことは言うまでもない。その学習法をそのままL2習得の際にも利用してしまうのはごく自然なことである。電車の中で、英語のつづりを指で描くかのように単語を覚えている学生をよく目にするのもそのためだろう。過去の研究結果によると、新出単語をカードやリストに書きとめ繰り返し書くことはあまり効果が無いと一部で指摘されている。しかし、日本人学習者に当てはめた場合、繰り返し書くという学習法が学習者の好みの学習スタイルであれば単語単位の反復練習も完全否定することはできない。日本人学習者の典型的な学習方法がL2習得の際にも転移する傾向があると考えられ、それが学習者の満足度を高めているとするならば、有効な学習法として活かすべきだと思う。よって、繰り返し書くこととreal contextsの理解を同時に促す学習方法を如何に取り入れていくかが課題となる。

## 4. L1の学習法の問題点

L1の学習経験をそのままL2の学習方法として適応される事があると述べてきたが、L1の場合、母語であるため単語の発音とその言葉の使い方をほぼ無意識のうちに理解していることが前提である。その上で繰り返し書く学習をするので有意義な効果がある。しかし、L2の語彙習得の際に同じことは当てはまりにくい。L2の単語だけを繰り返し書いたり音読することは語彙のみを増やす上で効果的であり一時的に学習者の満足度を高めるが、real contextsに意識しながら学習することを怠ってしまう可能性がある。そのためL1習得と同じだけの効果を期待することはできないだろう。好みにあった学習スタイルで語彙習得を試みると同時にL1とL2の語彙習得の過程の違いにも是非学習者に注目してもらいたい。

## 5. 語彙力強化のための学習法と今後の課題

学習者好みの学習スタイルを尊重しつつ、自身が担当したクラスでは以下のような語彙力強化のための学習法を提案してきた。その中でも特に好評だったものをここで紹介したいと思う。

### 1) オリジナル単語カードを作成する

TOEIC問題集など現在使っている教材(音声付)の会話文やアナウンス文で出てきた新出単語をカードに書く。音声は必ず3度以上聞く。1度目は文字を見ながら読まれている箇所を指で追い、音声と文字(単語の綴り)を一致させ、意味の理解を深めるよう心がける。2度目は文字から目を離して、英文を聞くことに集中し、聞いて意味が分からない単語が出てきたらスクリプトを使って再度、文字、発音と意味を確認する。3度目は、スクリプトを見ないでShadowingを行う(Shadowingとは1文を聞き終わってから繰り返し言うのではなく、音声を聞いた直後にその言葉をアウトプットすること)。最後に自分で作成した単語カードを使って読み書きの反復練習を行う。このことでreal contextsに近い状態の中で単語の使われ方を学ぶことが出来る。綴りだけでなく音声も頭に入るのでL1の語彙習得に近い学習が可能になる。

### 2) 単語集(市販のもの)を活用する

市販のTOEICや英検対策の単語集、または

大学受験のために高校時代に使い込んだ単語集を1冊用意する。過去に使い込んだものがあればそれが好ましい。

現在使用している問題集で長文読解やリスニング問題を解いているときに、見覚えはあるが意味が分からない単語が出てきたら、手持ちの単語集の索引を見て、同じ単語がないか確認する。もしも出てきたらその単語が含まれる例文を数回音読して、単語がどのように使われているかを確認する。このことで、同じ単語であっても違う使われ方がされていることに注意が向く。またその単語をリストかカードに書きとめることで、単語単体ではなく例文を含めた単語のイメージがインプットされる。自分で作成した単語リストを見た際に例文も頭に思い浮かべるよう心がける。

実際に学習法を実践した学生は「単語が覚えやすくなった」「英単語が読めるようになることで、忘れにくく記憶に残りやすくなる」などとコメントしている。その一方で Shadowing が上手にできない不満や、今までの学習法から脱却することへの不安の声もあるので、今後の課題として検討していきたい。

## D.H.ロレンスの動物の描写 について (その3)

経営学部  
山田 晶子

前号に引き続き今回も、ロレンスの作品に登場する動物と主題を関連させてその作品を紹介しようと思う。今回は雄鶏 (cock) を取り上げる。

1928年に雑誌『フォーラム』(Forum) に掲載された中編『逃げた雄鶏』(The Escaped Cock) は、ロレンスの死後の翌年の1931年に本として出版されたときは題名が『死んだ男』(The Man Who

Died) に変更されたが、ロレンス自身は『逃げた雄鶏』という題名の方を気に入っていたということである。現在では一般に『死んだ男』という題名で通っている。このように題名に表われている「雄鶏」と「死んだ男」は作品の主題と密接に関わっている。

この作品の舞台背景はエルサレムであり、時代はイエス・キリストが処刑された直後である。死んだ男と言う人物は一度も名前が書かれていないのであるが、文脈からイエス・キリストを指していることが分かる。小説は第1部と第2部に分かれており、第1部で百姓夫婦が飼っている雄鶏が登場する。この雄鶏は夫婦が飼っている他の家畜の雌鳥やロバとは異なって生命力に溢れている。夫婦は雄鶏が逃げないようにと、その片足を紐で繋いでいる。一方死んだ男は処刑されたのだが十字架から降ろされて経帷子に包まれて安置されていたところ、誰にも知られずに蘇ってフラフラしながら百姓夫婦の家にたどり着き、そこで匿われることになった。彼は、雄鶏が一度百姓の家から逃げ出したときに挙げた鬨の聲に刺激を受けて蘇ったのであった。このように、死んだ男の蘇りに雄鶏は大きく関わっているのである。だが単に生き返ったというだけではロレンスの主題は十分に描ききれない。いったん逃げた雄鶏はまた百姓に捕まえられ、匿われている男と一緒に敷地にいることになる。

空は青く周囲には緑が溢れている。そして雄鶏は同様に色鮮やかでオレンジ色と黒色の羽毛が生えており、鶏冠は赤くていかにも生命力豊かという印象を与えている。雄鶏はいくら縛られても大胆に外の未知の世界に向かって挑戦の雄叫びを上げて、雌鳥に跳びかかる。一方ロバは愚かでどんちょうである。この雄鶏とロバという2種類の動物の対立する性質は、死んだ(そして蘇った)男と他の人間に喩えられている。死んだ男の色は白色である。白色は彼がこの世に蘇って他の人間とは全く異質になっていること、つまり彼が浄化された色として表現されていると思われる。

雄鶏が、縛られていても憤慨と挑戦の気持ちを失わず、「彼(雄鶏)の生命は気味が悪いほどに砕けなかった」と書かれているのと同じく、死んだ男も強い生命力を持っている。彼は、意志に反

して蘇えた今、「幻滅によるむかつき」を何度も味わう。しかし雄鷄の中にうねる生命の波を見ているうちに、新生への決意は固まっていくのである。その新生とは、ロレンスが求める理想の形になるはずのものである。つまり、それは他者との均衡のある生活であり、他者への干渉や強要のない生活、受け取りすぎたり与えすぎたりという過多のない生活である。そしてそのような生活は、「死ぬ」という経験をすることによって可能になるのである。死んだ男は、「死んだ」ということが強調されていて、常に“The man who had died”と書き表されているように、「死ぬ」経験をしたことにより悟りを開いたのである。処刑される前の彼は、ただ与えるだけで受け取ることを知らない人間であって、「言葉」だけの精神的な生活を送っていた。だが今や彼は「死んだ」ことによって自らの限界を知ったのである。その限界とは、自分の領分は自分の皮膚の範囲内であるということである。つまり彼の肉体の強調である。「言葉」というものは、どこまでも飛んでいくおせっかいなブヨなのである。このようにこの作品でも、ロレンスは他の作品と同様に「肉体」の強調をしている。汚れて愚かな口バのような百姓夫婦は「死んだ」ことがないため再生もない。彼らには気品がなくて彼らの買っている雄鷄よりも劣っていると死んだ男には思われる。

旅立ちが出来るほどに傷が癒えた男は、雄鷄をもらって旅に出、途中で雄鷄を自由な世界に放つてやる。雄鷄が自分の王国を手に入れたことは、死んだ男も異教の世界（レバノンの近く）へ行って運命の女（アイシスに仕える巫女）と出会い、愛し合うことの伏線になっている。アイシスの女は、死んだ男と同様に、愚かな奴隷などの周囲の人間とは異質の存在である。第2部の冒頭で、奴隷の子どもたちが料理しようとしていた白い鳩が逃げて飛び去る。この鳩の逃亡が第1部の雄鷄の逃亡に対応していて、アイシスの女の夢が実現することの伏線になっている。

以上に述べてきたように、雄鷄はロレンスの中編『死んだ男』において、重要な意味を持っている動物である。

## ロンドンの第一印象

元 経営学部  
安藤 聡

ロンドンへの玄関口はたいていの場合ヒースロウ空港である。ロンドンの中心部から西におよそ25キロのところにある、世界的に見ても中心となるハブ空港のひとつだ。日本から英国へ向かう場合、よほど特殊な経路を取らない限りこの空港に着陸することになる。ロンドン中心部までは地下鉄ピカディリー・ラインで約40分、バスやタクシーで一時間、あるいは運賃は恐ろしく高いがヒースロウ・エクスプレスでパディントン駅まで15分である。

私が初めてロンドンに行ったのは1990年の夏だった。その頃はまだ、ヒースロウ着でない日本からの航空便もわずかながら残っていた。単に安かったからという理由で私が選んだのはソウル経由の大韓航空便だったが、これはロンドンから南に約40キロのガトウィック空港に着陸した。ガトウィックの方がロンドンへの距離も長いので、空港からの交通費も余計にかかるのだが、今思えばロンドンへの最初の入口としてこの空港を利用できたことは僥倖だったと言える。この後一年もしないうちに、大韓航空やヴァージン・アトランティック航空を含め日本からの主な便はすべてヒースロウ着になったのである。

ヒースロウからロンドンまでの車窓風景は割と単調である。地下鉄やヒースロウ・エクスプレスの場合、初めのうちは地下を走っているが、地上に出ると典型的なロンドン西郊の住宅街が延々と続く。地下鉄の場合は、ロンドンの中心に近づくたびに再び地下に潜る。バスやタクシーの場合にも、いかにも空港らしい景色が終わると普通の住宅街

になり、やがてハマースミス、アールズ・コート、ノッティング・ヒルそしてサウス・ケンジントンといったあたりから本格的にロンドンに入ることになる。そのまま進めばハロッズやハイド・パークの前を通る。いずれの場合も、それはそれでロンドンへのイントロダクションとして非常に正しいものであり、世界のあちこちから来た人々の多くはこのような形でロンドンとの初対面を果たすのだ。

だが、ガトウィックからの車窓風景は違う。空港からガトウィック・エクスプレスでロンドンに向かって北上すると、ホーリー、レッドヒル、クロイドンといった町を順に通過することになるが、これらの町と町の間にはサリー州の典型的な田園風景が広がっている。映画や写真で見たあのイングランド（南部）の風景そのものである。羊や馬が戯れている姿も見える。初めて乗車したガトウィック・エクスプレスが走り始めるとすぐに、線路際を狐の親子が歩いていたので感激したことを覚えている。この空港直通列車は途中駅には止まらないので駅の様子を見ることは出来ないが、駅の前にはなだらかな丘の斜面にヴィクトリア時代的な、あるいはもっと古そうな、統一美を誇る住宅街がどこまでも続いている。時刻はちょうど太陽が傾き始める頃だったので、美しい夕景を心ゆくまで鑑賞することが出来た。

このようにしてイングランドの第一印象を楽しませてくれたガトウィック・エクスプレスはやがて、クラップム・ジャンクションというプラットフォームが20本以上ある大きな駅を通過する。名作映画『小さな恋のメロディ』のラストシーンで、トロッコで駆け落ちするダニエルとメロディに向かって悪友オーンショーが「クラップム・ジャンクションで乗り換える」と叫ぶ、あのクラップム・ジャンクションだ。ここはロンドンの複数のターミナル駅からイングランド南部の各地へ向かう線路が交わる、いわば放射線の中心に当たる駅であり、「ジャンクション」という名前が示すとおり有名な「乗換駅」なのである。明治末期から昭和中期にかけて活躍したジャーナリストの長谷川如是は閉はこの駅の様子を、「八方から落ち合う近郊

の路線が、饅頭屋が軋んだように纏れ合っている」と描写している（『倫敦！ 倫敦？』岩波文庫）。

さて、ここからがいよいよ本格的なロンドンだ。何本もの線路が併走するが、その両側はディケンズの『オリヴァー・トゥイスト』の世界を思わせるような古い長屋が続いていたりする。

程なく車窓右手に奇妙な建造物が見える。これはバターシー火力発電所の廃墟だ。屋根の四隅に長い煙突が建っているので非常に目立つ。その先はテムズ川を渡る古い鉄橋で、列車はこのあたりで速度を落とすのでテムズの夕景をしばし楽しむことが出来る。そして列車は煤けた車両工場の裏地のようなところに入り込んで行くが、実はこれは工場でも車庫でもなくロンドンのヴィクトリア駅なのである。ガトウィックからの30分足らずの快適な汽車旅はこうして終わる。

なお、私はその後何度も英国を訪れ、ロンドンやその周辺の地理をある程度把握しているから今このように具体的な地名を挙げながら話をすることが出来るのだが、最初にガトウィックから列車に乗ってロンドンに向かったときにはもちろん、ここに挙げたような地名は認知していなかった。そして、当時の私の先入観では、先進国の首都というのは高層建築が林立している大都会のはずであった。いつまで経っても車窓に高い建物が見えないので、列車がヴィクトリアに近づいても私はそこがロンドンだとは夢にも思わなかったのである。テムズ川を渡ったときにも、風格のある川だとは思ったがそれがテムズだとは認識していなかった。騙されたような気分で私はヴィクトリア駅のプラットフォームに降り立ったのだった。

こうして初めて英国に行ってから18年を経た2008年の夏に、実に久しぶりにガトウィック経由でヴィクトリアからロンドンに入る機会があった。2000年以来ほぼ毎年のように夏期英国セミナーの引率を担当していたのだが、原油高による航空運賃高騰とポンド高の煽りを受け、この年ついに日本からロンドンへの直行便を利用することが出来なくなってしまい、あろう事かドバイ経由のエミレイツ航空になってしまったのだった。中部国際空港からドバイまでが約10時間、そしてドバイか

らガトウィックまでが約8時間だった。ドバイ国際空港もそれはそれで印象深いものではあったが、この話はまたの機会に譲ろう。

空港を出て駅にたどり着き、勉強のためと称して敢えて自動券売機を使わず、一人ずつ窓口で‘Single to London Victoria, please.’と言って切符を買わせ（四人一組で買うと約半額になるという事実を後で知った）、プラットフォームの両側に停車中のガトウィック・エクスプレス（車輦はあの頃よりずっと斬新なものに変わっていた）のうち敢えて発車時間が遅い方に乗り込んだ。これは車輦の一面を学生たちと私だけで占拠できるように、との配慮だ。なぜなら、18時間のフライト（ドバイでの乗り継ぎ時間を含めると22時間だ）で疲れているとは言え、彼ら彼女ら（特に「彼女ら」）が初めて見る英国に歓声を上げまくることが、これまでの経験から予想できたからである。他の乗客の迷惑にならぬよう、なるべく空いている車輦の片隅を占拠した。例年、ヒースロウからのバスや地下鉄の平凡な車窓風景でさえそうなのだから、ガトウィックからヴィクトリアまでの美しい田園風景では一体どんな騒ぎになってしまうのか。だが私の予想は杞憂に終わり、彼ら彼女らはそれほど大声で騒ぐこともなく、デジタルカメラを手に行儀良く、それでも目を輝かせて、窓の外と互いの顔を交互に見ながら初めてのイングランドを楽しんでいた。

学生たちと一緒にいると、すっかり忘れていた初めての英国に対する感動を思い出すことが出来る。列車が走り出して駅を出て空港を離れると、まず目に入るのが広大な田園風景だ。あまり意識されていない事実だが、イングランドの人口密度は日本のそれよりも高い。そのことを知らなくとも、イングランドがこれほど広々とした長閑な所だとは、日本人には想像し難い。日本と違って高い山がないことから、イングランドの人口は拡散していて、それゆえに都市周辺でも日本よりずっと閑散としているのだ。やがてそこに羊や牛、そして馬などが見えて来る。こんなに広い土地を誰が何のために所有しているのか、という疑問も当然湧き出てくる。

町が見えてくると、次の感動ポイントは煙突である。ほとんどの建物に煙突があるという事実、また煙突が並ぶ風景に、私はすっかり慣れてしまっているが彼ら彼女らは感動を禁じ得ない。しかも、煙突がある建物はほぼ例外なく、ヴィクトリア時代かそれよりもっと前に建てられたものであり、味わい深い煉瓦造りや石造りの建物なのである。日本で築百年といえば重要文化財に指定されるほどのものだが、ここではそういう建築物が普通に現役で使われていて、当たり前のようにそこに佇んでいるのだ。そして程なくヴィクトリアに到着してしまうのだが、その感動的な煙突の最後を飾ってくれるのが、前述のバターシー発電所である。

プラットフォームに降り立つと、いよいよ日常のロンドンだ。皆スーツケースを引きずっているので、長いプラットフォームの端をゆっくり歩いて行く。地下鉄の切符売り場まで延々と歩き、窓口の長い列に並んで（並ぶことは英国生活の重要な一部を占めるということをここで初めて実感する）ロンドン地下鉄のプリペイドカードである「オイスター・カード」を購入し（なぜ「オイスター」なのかをよく訊かれるが、いまだに答えられない）、階段を降りて地下鉄に乗る。ホテルはアールズ・コートだったので、ディストリクト・ライン（緑色の線）の西方向行きだ。初めての学生たちは、ロンドンの地下鉄が意外にバリアフリー化されていないことに驚く。これも私にとっては、今更気づかない問題点である。

最初に来たのはサークル・ライン（黄色の線）だったので、これには乗らずに見送る。次にウィンブルドン行きが来たので、三カ所ほどに分かれて乗り込む。車輦が古く汚いことやよく揺れること、また暑いのに冷房がないことに呆れる。この電車の終着駅はあのテニスで有名なウィンブルドンなのか、と訊かれるのでそうだと答える。グロスター・ロードを発車したとき、次で降りるので絶対に出遅れないように、と遠くにいる学生に伝言していると、電車が唐突に線路の途中で止まってしまう。信号待ちとも故障とも人身事故とも、何の説明もない。アールズ・コートの手前で合流があるので、ここで必ず待たされるのだ。説明が

ないことが英国流であるという事実にも、学生たちは次第に気づいて行く。

降り立ったアールズ・コート駅の駅は工事中だった。ロンドンでは、また英国では、いつもどこかが工事中だということをこうして実感し、エスカレーターのない階段をスーツケースを抱えて登り、改札を出て道を渡りホテルまで歩く。学生たちはここで初めて煉瓦色の街並みや赤い二階建てバスや黒いタクシーを間近に見て感動しているが、写真を撮る余裕はもはやない。そういえば私が初めてロンドンに来た時も、ヴィクトリアから地下鉄に乗ってこのアールズ・コートに降り立った。今回はもちろん、大学の国際交流課が旅行会社を通して手配してくれたちゃんとしたホテルに泊まるのだが、あの時は林立する安いホテル（通りの北側が割とちゃんとしたホテル、南側が安いホテルのエリアだ）を一軒ずつ訪ね歩き、一番安かったところに泊まったのだった。

ホテルにチェックインを済ませ、各自に部屋のカードキーが渡された。学生たちは若いし、初めてのロンドンなので元気だ。パブに行きたいか、と訊くと一人残らず行きたいと即答したので、一時間後にこのロビーに集合、ということにしてそれぞれの部屋に入る。パブはアールズ・コートにももちろんあるが、せっかくだから前年の引率時に見つけたテムズ川沿いの味わい深いパブまで、地下鉄に二駅ほど乗って行くことにする。前年はもちろんヒースロウからロンドン入りし、宿泊はアールズ・コートより二駅ヒースロウ寄りのハマスミスだったのだ。パブは川沿いの、かつてウィリアム・モリスが住んでいた家の斜向いにある。この家にはモリスより前の時代に、あのルイス・キャロルの友人で、C・S・ルイスにも多大な影響を与えた作家ジョージ・マクドナルドが住んでいた。

全員で座れるテーブルを片隅に確保し、数名ずつに分かれてカウンターに注文に行く。注文時には必ず 'please' を忘れないよう注意を促す。未成年と酒を嗜まない者で、生姜が嫌いでない者には、私の好物でもあるジンジャー・ピアを勧める。これは英国以外では滅多にお目にかかれぬ伝統的

な清涼飲料である。かつてオクスフォードで、大勢の学生を連れてパブに入ったとき、ジンジャー・ピアを気に入った者が多く皆で何回もお代わりを注文したので、最後にはその店にあったジンジャー・ピアを全部飲み干してしまった、ということがあった。別な年のセミナーではこれを好きになれなかった学生が多く、「先生はなぜこんなに不味いものをいつも何杯も飲むのか」と不思議がられた。そう言えば、私が初めてロンドンに着いた頃には、一人でパブに入る勇気もなかったし、看板に「パブ」と書いてあるわけでもないので、どれがパブなのかもよくわかっていなかった。

## 木にかかる「青虫」

経営学部

矢田 博士

### 一、はじめに

本誌20号で、中国の古典においては「青虫」とは青や緑色の虫の総称であること、唐宋の詩においても「蝶蛾の幼虫」に限らず、「イナゴ」「クモ」「セミ」など、いろいろな虫が「青虫」と表現されていることを確認した<sup>(1)</sup>。また本誌21号では、北宋・秦觀の「秋日」詩に詠われている「秋の糸を吐く青虫」が「セミ」である可能性が高いことを指摘した<sup>(2)</sup>。

本稿では、唐宋の詩に見える「青虫」の中から、木に棲息し「懸・掛・挂」という語で表現される例を取り上げ、それが何の虫を指すのか、確かめてみたい。なお、「懸・掛・挂」は、いずれも「かかる」と訓み、「ひっかかる」「ぶら下がる・垂れ下がる」「高く中空に浮かぶようにして存在

する」等の意味を表す。

## 二、木にかかる青虫

唐宋の詩における「青虫」の用例については、唐詩に七例、宋詩に二十五例の計三十二例が確認でき、その中に、木に棲息し「懸・掛・挂」という語で表現される「青虫」の例が四例見られる。

まず、唐・杜甫の五言律詩「課小竚鉏斫舎北果林枝蔓荒穢淨訖移牀」[小竚に課して舎北の果林枝蔓荒穢なるを鉏斫せしめ、淨し訖りて牀を移す]<sup>(3)</sup>三首・其二の頷聯に、果樹園の木に「懸かる青虫」を描いて、

青虫懸就日 青虫 懸かりて日に就き  
朱果落封泥 朱果 落ちて泥に封ぜらる  
《青い虫が木の上の方にかかっている日の光りを浴び、朱い果実が地に落ちて泥に埋まる。》

とあり、北宋・梅堯臣の七言律詩「宮槐」<sup>(4)</sup>の頸聯に、宮殿の槐の木に「掛かる青虫」を描いて、

青虫掛後蜂銜子 青虫 掛かる後 蜂は子を  
銜ね  
素月生時桂並栽 素月 生ずる時 桂は栽を  
並ぶ  
《宮殿の槐の木に青い虫がかかる頃になると、蜂は巣の中に子を連れ、白く輝く月が出はじめる時、桂は月面に苗木を並べる。》<sup>(5)</sup>

とあり、北宋・文同の五言律詩「高槐」の頸聯に、高い槐の木に「挂かる青虫」を描いて、

青虫暖自挂 青虫 暖かにして 自ずから挂  
かり  
黄鳥晴輒哢 黄鳥 晴れて 輒ち哢る  
《暖かくなり青い虫が高い槐の木にかかり、空が晴れて黄色い鳥が囀る。》

とあり、北宋・賀鑄の五言律詩「快哉亭朝暮寓目

[快哉亭にて朝暮に寓目す]二首・其二の頷聯にも、やはり槐の木に「懸かる青虫」を描いて、以下のようにある。

苔衣冑白羽 苔衣 白羽 冑かり  
槐蔭懸青虫 槐蔭 青虫 懸かる  
《苔には鳥の白い羽がひっかかっており、槐の葉陰には青い虫がかかっている。》

## 三、「懸・掛・挂」と表現される虫

では、以上の四例の詩に見える「青虫」は、いったい何か。おそらくそれは、以下に挙げる用例から、「クモ」を指す可能性が高いと思われる。

まず、南朝梁・吳均の五言古詩「雜絶句詩四首・其三」に、

蜘蛛簷下挂 蜘蛛 簷下にかかり  
絡緯井辺啼 絡緯 井辺に啼く  
《蜘蛛が軒下にかかり、絡緯が井戸の辺りで鳴いている。》

とあり、唐・王維の五言古詩「贈祖三詠」[祖三詠に贈る]に、

蠨蛸挂虚牖 蠨蛸 虚牖に挂かり  
蟋蟀鸣前除 蟋蟀 前除に鳴く  
《蠨蛸が人気のない窓にかかり、蟋蟀が屋敷の前の階段の辺りで鳴いている。》

とあり、唐・元稹の五言古詩「秋堂夕」[秋堂の夕]に、

書卷満牀席 書卷 牀席に満ち  
蠨蛸懸復升 蠨蛸 懸かりて復た升る  
《寝台や敷物のあたりには、たくさんの書籍が置かれている。蠨蛸が垂れ下がってはまた上る。》

とあり、さらに北宋・黄庭堅の五言絶句「次韻吉老十小詩」[吉老の十小詩に次韻す]十首・其五



にも、以下のようにある。

紅梨啄烏鶻 こうり うじやく ついば  
 紅梨 烏鶻 啄み  
 残菊掛蠨蛸 かきさき りんご くも しお  
 残菊 蠨蛸 掛かる  
 《烏鶻が紅梨を啄み、蠨蛸が萎れかけた菊にかかっている。》

「懸・掛・挂」という語で表現される虫は何かといった観点から、唐宋の詩を調べてみたところ、「懸・掛・挂」という語が「蜘蛛」「蠨蛸（クモの一種）」とともに用いられる例については、このように容易に見つけることができるものの、その他の虫については、ほとんどそのような例を見出すことはできない。<sup>(6)</sup>一方、「クモ」という虫もまた「青虫」と表現されることがある点については、すでに確認した通りである。

以上のことを総合すると、杜甫・梅堯臣・文同・賀鑄の詩に詠われている「木にかかる青虫」は、「クモ」である可能性が高いと判断されるのである。

#### 四、おわりに

「かかる」と訓む「懸・掛・挂」という語が、唐宋の詩に詠われる数ある虫の中でも、とりわけ「クモ」の様子を描く際に多く用いられること、それゆえ杜甫・梅堯臣・文同・賀鑄の詩に詠われている「木にかかる青虫」もまた、「クモ」である可能性が高いことについては、前節で確認した通りである。

ところで、「懸・掛・挂」という語には、「ひっかかる」「ぶら下がる・垂れ下がる」「高く空中に浮かぶようにして存在する」等の複数の意味がある。では、はたして詩人たちは、「クモ」のどのような様子を、「懸・掛・挂」という語を用いて詩に描いたのであろうか。また、杜甫・梅堯臣・文同・賀鑄の詩に見える「木にかかる青虫」が「クモ」を指すとするならば、なぜ彼らははっきりと「蜘蛛」「蠨蛸」と表現せずに、何の虫かがすぐには特定できないような「青虫」というあいまいな表現をあえて用いたのであろうか。最後に

これらの二点について私見を述べ、本稿の結語としたい。

第一点目について。例えば、唐・元稹「秋堂夕[秋堂の夕]」の「蠨蛸懸復升」などは、「懸かりて」の後に「復た升る」と続くことから、「蠨蛸が垂れ下がるさま」を「懸」という語で表している例と見てよいであろう。では、そのほかの全ての例でも、「懸・掛・挂」という語が「クモの垂れ下がるさま」を表しているのであろうか。もちろんそのように解釈した方がふさわしいと思われる例はほかにも見られるであろうが、全ての例がそうであるとは限らないであろう。毎年秋になると、葉を落とした木の枝と枝との間に網を張り、その中心で静かにじっと獲物がかかるのを待ち続けるクモの姿をよく目にすることがある。その姿を観察していると、網の向こうに空が透けて見え、あたかもクモが中空に浮かんでいるかのような錯覚を覚えることがある。あるいはそのようなクモの姿を「懸・掛・挂」という語で表した例も、中にはあるのではないだろうか。例えば、杜甫や梅堯臣などの詩に見える「木にかかる青虫」の例などは、そのように解釈した方がふさわしいように思えるのである。

第二点目について。なぜ杜甫・梅堯臣・文同・賀鑄は「クモ」を表現するにあたり、すぐには何の虫かが特定できない「青虫」というあいまいな表現をあえて用いたのか。その理由は、おそらく彼らの詩がいずれも律詩である点に求められるであろう。杜甫と賀鑄の例は律詩の頷聯、梅堯臣と文同の例は律詩の頸聯にあたる。律詩の頷聯と頸聯は原則として対句にしなければならない。つまり、彼らが「クモ」という虫を「青虫（青い虫）」と表現したのは、「朱果（朱い果実）」「素月（素い月）」「黄鳥（黄色い鳥）」「白羽（白い羽）」と対にするためであったと考えられるのである。

#### 【注】

- (1) 「中国古典詩歌に見える「青虫」」(『語研ニュース』20号、2008年12月)を参照。なお、【蜘蛛と思われる例】の箇所、南宋・俞德隣の詩に見える「戸口のあたりで糸を織る青虫」

について、南朝梁・沈約や唐・元稹の詩を手がかりに「クモ」と判断したが、より分かりやすい例として、南朝梁・何遜の「劉博士江丞朱從事同顧不值作詩云爾〔劉博士・江丞・朱從事 同に顧みらるるも値わず、詩を作りて爾か云う〕」という五言古詩に、以下のようないくつかあることに気づいたので、補足しておく。

蜘蛛正網戸 蜘蛛 正に戸に網し  
落花紛入膝 落花 紛として膝に入る  
《蜘蛛はちょうど戸口の当たりに網を張り、花びらはひらひらと部屋に入り膝もとに落ちる。》

- (2) 「秋の糸を吐く青虫」(『語研ニュース』21号、2009年5月)を参照。
- (3) 詩題の意味は、「子供に仕事を割り当て、家の北にある果樹園の枝や蔓および荒れてきたないものを鋤いたり切らせたりし、きれいになったのでそこに椅子を持ち出した。」というもの。
- (4) 正確な詩題は、「和范景仁王景彝殿中雜題〔范景仁・王景彝の殿中雜題に和す〕三十八首」の其十「宮槐」。
- (5) 「素月」の句は、おそらく月には桂の木が生えているという伝説を踏まえるものと思われる。ここでは、新月から満月へと月が満ちるに従い、月面の桂の木も苗木から徐々に生長する、という方向で解釈してみた。
- (6) 唐・雍陶の七言律詩「秋居病中」の頸聯に、  
荒簷数蝶懸蛛網 荒簷 数蝶 蛛網に懸かり  
空屋孤螢入燕巢 空屋 孤螢 燕巢に入る  
《数匹の蝶が荒れ果てた軒に張られた蜘蛛の網にひっかかり、一匹の螢が人気のない家屋に作られた燕の巣の中に入る。》とあるように、蜘蛛の網にひっかかる蝶を「懸」という語で表現した例はある。また、隋・薛道衡の五言古詩「昔昔鹽」に、  
暗牖懸蛛網 暗牖に 蛛網 懸かり  
空梁落燕泥 空梁に 燕泥 落つ

《暗い窓に蜘蛛の網がひっかかり、人気のない家屋の梁から燕の巣の泥が落ちる。》とあるように、窓にひっかかる蜘蛛の巣を「懸」という語で表現した例もある。いずれにしる、「懸・掛・挂」は「クモ」と縁の深い語と言えそうである。

## 色彩の不思議、伊藤若冲の 『動植綵絵』

経営学部

島田 了

ドイツの国旗は何色でしたかという質問をしたらどうだろうか。フランスの国旗なら誰だってすぐに答えられるだろう、青、白、赤だ。いろいろなところで目にするし、さわやかで素敵な印象を与えるから簡単には忘れない。でもドイツはどうだったか、子供の頃小学校の運動会でかかっていた万国旗のなかのどれかだった、でもどれだったかな。確かに日ごろめったにお目にかかるものではない、知らなくて恥ずかしくもなんともない、わからなければ調べればいいだけだ。手ごろな図鑑、最近ならネットを使えばすぐわかるはずだ。しかしこのとき図版だけを見て答えてはいけない。図版を見れば、上から順番に黒、赤、黄となっている。しかしこれは不正解、文字解説を見れば、黒、赤、金と書いてある、こちらが正解なのである。

あらためて図を見てもどうみても黄色にしか見えない、確かに印刷してあるのは黄色である。じつはこれは、約束事のひとつなのである。紋章学というものがあり、歴史上の王族や貴族の持つ紋章を分類したりする学問がある、また王政をとっている国では紋章を管理する役所もある。たとえ

ば、イギリスには紋章院という役所があり、そこで紋章の管理や新たな紋章の授与を行なっている。紋章の世界には、形や模様など細かな決まりがたくさんあるが、その中で色に関しては、使える色は7色に限定されていて、金属色として金と銀があり、金は黄色、銀は白色であらわす事になっている。ともかくそういう決まりなのである。金の輝きを手ごろな色である黄色で代用して、それで納得しなさいという安易な解決だと思っていた。

しかし最近、ある番組のなかで面白いことを知った。その番組とは、東京の国立博物館で2009年の秋に開催されている『皇室の名宝 - 日本美の華』という特別展を紹介する番組で、そこで伊藤若冲の『動植綵絵』について解説がなされていた。

伊藤若冲は1716年に京都の大きな青物問屋の跡取り息子として生まれるが、絵を描くこと以外に興味を持たず、40歳になると家督を弟に譲って隠居を決め、後は、他の趣味も持たず、酒も飲まず、一人で画業に専念して85歳まで京都で活躍した江戸時代中期の画家である。その画風は綿密な写生に基づいた緻密な画面と大胆な色彩で知られている、近年国内国外を問わず大変人気の高い画家である。

『動植綵絵』は、その鮮やかな色彩美で知られる伊藤若冲が、当時最高品質の画絹や絵の具を使い、10年の歳月を惜しみなくかけて製作した傑作で、鶏、鳳凰、草花、魚介類をさまざまな色彩と形態で描いたもので、全30幅からなるものである。これを若冲が縁のあった相国寺に寄進したものが、のちに皇室御物となり現在宮内庁三の丸尚蔵館の所蔵作として今回の展覧会の目玉の一つとなっている。

この『動植綵絵』のうちのひとつ、1765年から66年ごろにかけて製作された「老松白鳳図」について、次のような解説がおこなわれていた。この絵は『動植綵絵』のなかでもひときわあでやかに白と金色に輝く鳳凰が描かれている。この絵、金粉を混ぜた絵の具、金泥が使われていると長く考えられていたのだが、最近の科学調査の結果金はまったく使われておらず、裏彩色という技法によって裏から黄土という黄色の絵の具が使われている

だけであった。表の白、裏の黄色、絹の輝きの組み合わせがこの鳳凰の輝く美しさをつくりあげていたというのである。実際に比較実験で金泥を使って描いた場合よりも、このようにして黄色を使った方がより金色らしい効果を上げていることもわかった。おそらく若冲も数限りない組み合わせを試してこれだという色を見つけ出したのであろう。

そのほかに彼の研究熱心さを示す例として、ブルシアンブルーという絵の具の使用がある。おなじく『動植綵絵』のなかで一匹の魚にこの絵の具を使っていることが今回の科学調査でわかった。ブルシアンブルーという絵の具は、1704年にベルリンで発明されたもののその製法が秘密にされていたもので、1726年になってイギリス人によってその製法が広く知られるようになったばかりの絵の具でヨーロッパでも広く使用されるようになったのはこの頃のことである。日本では平賀源内が1763年に紹介しているが、そのすぐあとに若冲はこの最新の、貴重な絵の具を使用していたわけである。彼の色彩に対する執念が見えるようである。

その後の、19世紀も終わりのころあるフランスの画家はひとつの教会、あるいは積みわらを描きながら、その刻々と変化する色彩と姿をその多様さにおいて描きとめようとした。

眼に見えている色が本当の色ではないことを明確に主張したのは印象派の画家たちといわれているが、色彩の不思議を知り、その効果を知る人はそれ以前にすでにいたわけである。

そもそも私たちの見ている景色の色彩は、他の国の人々、たとえばヨーロッパの人たちが見ている景色の色彩と全く同じではない、それを照らしている太陽の光が決定的に違うのだから。夏の強い日差しで見える風景と冬の晴れた日の穏やかな日差しの中で見る風景はもはやまったく別物であると感じたことなど、皆さんも経験済みであろう。

これを感覚の頼りなさとして嘆くこともできよう、しかしまたこの色彩の不思議さを自然の贈りものとしてただ驚き感嘆することもできる。

さてもうすぐ訪れる本格的な紅葉の季節、私たちはその見事な葉の色に毎年魅了されているが、紅葉を美しく見せているのは実はその変化した葉

の色だけではなく、秋になって黄金色に傾いた日光の助けも大きいのではないかと思う。今年の紅葉はぜひ光にも注目してみたいものだ。



老松白鳳図

出典:フリー百科辞典『ウィキペディア』

#### 編集後記

『Goken News』No.22の編集後記を書くに当たり、先ず悲しいお知らせをしなければなりません。本年11月9日に現代中国学部 of 英語担当教員であった佐野俊彦先生が急逝されました。佐野先生は愛知大学の教養学部にて赴任された後、愛知大学の学部再編で現代中国学部に移籍され、新学部の発展のために大いに貢献をされました。大学運営の面と英語科目の担当の面で貴重な働きをされてきましたが、中でも4年前に名古屋キャンパスで始まった2006年度新カリキュラムのTOEIC科目の浸透のために活躍をされてきました。英語教員一同のみならず全教員が深い哀悼の思いに包まれております。心よりご冥福をお祈り申し上げます。合掌。

次に、悲しいお知らせの後では、嬉しいお知らせも書きたいと思えます。法学部の北尾泰幸先生が本年6月に大阪大学大学院から言語文化学の博士号を授与されました。北尾先生は4年前に愛知大学の嘱託教員として赴任され、3年前に助教として専任教員になられて今日まで愛知大学の英語教育や運営の面において大きく貢献されてきました。博士号取得はまことに嬉しいことでもあります。おめでとうございます。ちなみに、本号の表紙の写真は、北尾先生が今年の夏休みに学会出席のためハンガリーへ出張されたときに撮られたものです。

さて、第22号の『Goken News』の目次を見ますと安藤聡先生のお名前が見えます。安藤先生は、本年4月に大妻女子大学へ移っていかれたのですが、投稿者が少ないかもしれない、と思って筆者が寄稿をお願いしたので、かなり長い玉稿を寄稿してくださって感謝を申し上げます。ロンドンへの初めての旅を振り返りながら、ガドウィック空港やロンドンの地下鉄やロンドン近郊の風景を名文で綴られており、拝読して感激をしました。どうも有難うございました。(A.Y.)